

ウルリム
響

星 環

特定非営利活動法人

聖公会生野センター機関誌

第 57 号

2013 年 8 月 10 日発行

題字：康秀峰

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

E-mail: ikuno@nskk.org

聖公会生野センター 検索



韓国から伝統音楽グループ「テハンサラム」の皆さん、のりばんで慰問公演(3月27日)



プール学院高校3年生のボランティア体験

(3月)



第12回クリンもだん美術展・シンポジウム (11月)



『市民K、教会を出る』という本を訳している。韓国のプロテスタント教会の歴史を批判的に検証する金鎮虎牧師の作品だ。植民地時代から現代にいたる社会的な分析とともに教会のリアルな姿が生き生きと伝わってきて面白い。確かに韓国の「近代」はキリスト教とともにあった。それは民衆とともに生きた姿とも言えるし国家との共犯関係でもある。日本からは想像もつかないダイナミックな歴史に「超大型教会」出現の背景が解き明かされる。そんな韓国で、二十一世紀に入り人々の教会離れが止まらない。金牧師の分析と新しい教会像の提示を日本の現状に照らし合わせると新たな課題が見えてくる気がする。

最近、韓国の大学生たちが久々に政治集会を行っている。先の大統領選挙の際に「国家情報院」という政府機関が政治介入し保守系候補を当選に導いた問題を糾弾する集会だ。学生たちは久々に「時局声明」を出し、記者会見を行い、その輪は全国に広がっている。独裁政権を打倒したあの頃を思い出す人々も少なくないだろう。しかし様子は異なっている。かつてのように団結旗が乱立し、こぶしを突き上げながら運動歌を歌うような集会ではない。彼らの集会は「キャンドル集会」と呼ばれ、手に手にろうそくを持った人々が肅々と集っている。まるで「祈りの会」のようだ。7月には「参与連帯」のような有力市民団体主催の大規模集会が行われたが、スタートは各大学学生会の「時局声明」だった。政治運動に熟練した学生や労働組合、市民運動の活動家などいわゆる「運動圏」ではない人々が集結し声を上げる。このようなスタイルは2002年の「在韓米軍反対」運動から始まったのだという。米軍の装甲車が一般道で女子中学生をひき殺したが、犯人は裁かれなかった。「日米地位協定」よりも劣悪なSOFAと呼ばれる協定が在韓米軍を保護しているからだ。学生たちはメールとSNS経由で怒りを共有し拡散させた。ネット利用者が続々とこれに加わった。ソ

韓国・「市民宗教」の誕生

香山洋人

ウル市庁舎前の抗議集会は社会運動団体が取り仕切ったが、集まった人々のほとんどは一般の学生、市民たちだった。最前列に並べられた団結旗に向かって後方から声上がる。「じゃまだ、旗をどけろ！」。苦難とともに民主化を達成した「運動圏」が権威を失った瞬間だった。

これは「市民宗教」の誕生だったと金牧師はいう。専門家が組織し主導する運動ではなく、事件をきっかけに自然発生的に集まる人々の群れは「祈りの会」のようにキャンドルの明かりに包まれていた。「人々は教会に行きたいのだが、行きたい教会がない」。この言葉は韓国だけのものではない。人々は自らの宗教性に向き合える場を探している。既存の宗教に魅力がない以上、無責任で心地よい「スピリチュアル」な世界が第一候補になるのは自然の流れだろう。しかしそれだけでは満たされない。日本の市民は、利己主義を乗り越え希望を確かにする場をどこに見出そうとしているだろう。震災被災者に連帯する運動はどうか、「脱原発」のうねりはどうか。目立たない地道な運動にこそ説得力があるのかもしれない。

超大型教会にもはや未来はない、メンバー相互に意思疎通可能で外部に開かれた小さな教会にこそ希望がある、と金牧師は言う。小さな教会ならすでにあるではないか、地域に開かれ互いに聴き合うことができれば、日本の教会にこそ希望があるのかもしれない。

(かやま ひろと 司祭 東京教区千住基督教会牧師)



ソウルにおけるキャンドル集会

在日3世から感じる済州4・3

梁 優子

私の両親の出生地は、「済州道南済州郡安徳面」と戸籍に記載されている。今年四月、「済州島四・三事件 65周年慰霊祭・済州島訪問ツアー」に参加し、初めて安徳面犠牲者慰霊碑に黙祷を捧げることができた。安徳面犠牲者慰霊碑には강방영の詩が刻まれており、その中に「가슴으로 날아든 총알, 흠으로 스르 피 (胸にくい込む弾丸、土にしみこむ血)」という一文がある。これが私につながる人たちの経験だったのか？弾丸が胸にくいこむことも、その血が土にしみこむことも、私の日常の生活経験とは次元を異にする。この詩によって、在日3世の私はジェノサイドの経験をもつ次世代としてのリアリティある言葉をもたないことを、つきつけられたようだ。済州4・3を考える続けることは、想像することさえなかったことを想像することを、自分に求め続けることでもある。

今はもう鬼籍に入った父の戸籍には「西紀壱九四八年五月貳拾四日火災예罹하여」という記載がはっきりと読みとれるが、この日は、『済州島四・三事件 第三巻流血惨事への前哨戦』（1996 済民日報四・三取材班 金重明訳）によると「ディーン軍政長官が、1948年の5・10選挙で投票数が過半数に達しなかった済州島の二つの選挙区について、投票結果無効を宣言し、再選挙を六月二十三日に実施すると発表」した日である。林明林「済州島四・三人民抗争に関する研究」（高麗大学修士論文1988）は「単選が破綻することによって、米軍政の鎮圧作戦がさらに強力なものになるという点、そしてその単選を通して政治権力を掌握する勢力が、自分たちの政治権力掌握を正面から拒否した勢力であった彼らに対し、ほとんど無制限の暴力を行使するであろうという点、この二点は、われわれが容易に予想しうるものであった。」と指摘している。では、私の家族史において1948年5月24日の火災は、どのような意味をもつのだろうか？その日以降、親族はどのような生活を送ってきたのだろうか？問い

は深まるばかりである。

植民地統治と済州4・3そして植民地主義の放置は国境をこえ、済州島につながる多くの親子・親族関係を断絶させた。なぜ植民地統治から解放されたはずの済州島で、同族が殺しあい、その場で生活する事が不可能となり、出生地ではない日本の差別社会の中で無権利なまま生きざるをえなかったのか。今も尚、済州4・3は、在日済州出身者の心の奥深いところで疼き続けているのだと思う。いや、疼いていることさえ、気がつかなくさせられているのかもしれない。その疼きに気がつき、疼きをいやすことからはじまるのだと思う。疼きを語りにかえ、語り継ぐためには、国境をまたぎ生きた在日済州島出身者の暗がりに追いやられた生活世界がかけがえもなく大切にされ、安心して生きている社会基盤が必要であることはいうまでもない。

今も尚、済州島には発掘されていない遺骸がある。済州4・3を問い続けることは、私の家族史であり、全人類的なジェノサイドの問いにストレートに向き合うことでもあるように思われる。私は、この秋には、また済州島を訪れようと思っている。

(やん うじゃ 大阪市立大学大学院博士課程
生野区在住)



2013年4月3日 第65周年慰霊祭にて献花

歴史をめぐる逆風の中で

= こんな時代にこそ理想と希望を求めたい =

田中趙 美奈子

日本の敗戦から70年近くが経とうとしている。植民地支配や戦争の記憶の風化だけでなく、歴史修正主義がいつそう広がっている今の日本社会について、憤りやもどかしさを感じるが多々ある。

例えば、政治家による日本軍「慰安婦」被害者を深く傷つける言動が、最近もまた繰り返されている。それ自体も不快だけれど、今の日本で少なくない数の人々がそういった言説に流されていっているようで怖い。特に若い世代が歴史についてよく知らないままに、韓国をはじめとした外国から日本ばかりが昔のことで不当に責められていると感じているのではないかと危惧する。

私は20代の半ば以降、在日コリアンの青年団体に参加するようになり、日本による朝鮮植民地支配やアジア侵略の歴史についてそれなりに学んだり考えたりすることが多い。けれど、学生の頃は歴史や国際関係などについて知識も関心もなく過ごしていた。そして、過去の日本の行為について他国から責任を問われるということについては、何だか面倒くさそうだと関わりたくないと考えていた。

私は大人になるまで、自分の母方が在日朝鮮人の家系であることを知らず、自分を「生粋の日本人」だと思っていた。小学校から日本の「国民教育」を受けてきた私は、「国民の物語」—日本が先の大戦に敗れ、空襲や原爆投下などの甚大な被害を受けながらも、戦後日本人は懸命な努力によって復興と経済発展を成し遂げた—を素直に受け入れていた。そして、自分もそん



橋下大阪市長の「慰安婦」発言に抗議する人々 (5月 大阪市役所にて)

な「日本人」に属しているということにある種の誇らしさを感じていたように思う。(そんなに強固なものでなくて、なんとなく。)

けれど年齢が上がるにつれて、歴史の授業やニュースなどで知るからか、どうやら日本が戦時中にアジアの国々でかなりひどいことをしていたらしいと薄々気づいてくる。そこで、「ちゃんと歴史を勉強しよう」とはならない。やっぱり面倒くさいし(私にとって歴史は「暗記科目」でしかなかった)、日本が行った加害の事実を知ることが、日本人である自分にとって窮屈な気がした。

そうやってスルーできてしまうのは、それら過去の歴史と自分や今の社会がつながっているということが実感できていなかったからだと思ふ。そして、日本人マジョリティとして生きてきたことで、歴史や社会の矛盾を受けて苦しんでいる弱者の痛みについて全く他人事で鈍感だった。

自分のルーツを自覚し関心を持って歴史を学ぶようになってから、それまで自分が見ていたものが一面的な、日本の国家の側に立ったものであると気づいて愕然とした。たくさんの戦争被害者の体験を読んだり聞いたりするたびに、その痛みの大きさ、傷の深さに胸が苦しくなった。歴史を見るときは「被害者の側に立った視点」が大切であり、歴史を知ることの意味とは、歴史に学び、二度と同じ過ちを犯さないようにすることなのだと思ふ。

人権侵害について「当時は必要だった」「仕方なかった」という言葉で済ませられるのは、被害にあう人間のことをこれっぽっちも考えていないからだろう。たとえすべての人が平等で人権が尊重される世界を実現することが困難であるとしても、あきらめるのではなく理想に近づこうと努力することで希望が生まれるのではないだろうか。逆風は強いけれど、思いを同じくする人たちとつながり、その輪を広げていきたいと思ふ。

(たなかちよう みなこ 在日コリアン青年連合・KEY会員)

核は安全なエネルギー？

松山 健作



『脱核新聞』2013年3月号

参院選の一つの論点である原発問題。立候補者たちは、さまざまな公約を述べる中で原発推進、反対という立場を表明せざるを得ない現実がある。まさにそれが私たち社会の抱えている大きな問題の一つだからだ。私自身は「どんな小さな被曝であっても、生命体は被曝を避けなければならない」という立場から原発断固反対を掲げている。なぜなら、被曝は生命体の命を左右する問題だからだ。少量の放射線を浴びたり、普段から口にしている食物により摂取したからといって、今すぐ体に何か支障を来すわけでもない。しかし、それらが積み重なったときにどんな苦しみを生むかを私たちは前もって感知しなければならないだろう。

原発に関する文献は日本で多く刊行されるのに対して、韓国では少ない。少数の運動家や研究者によって刊行される場合や1945年広島・長崎への原爆投下による朝鮮人被害者との関わりから言及されるものなどが目を引く程度である。しかし最近、興味深いのは『脱核新聞』という月刊新聞が刊行されていることだ。この新聞は韓国における原発事情を中心に扱っており、日本の運動家たちと連帯しようという意識が見られる。現に編集者には日本人もいるようだ。前置きが長くなったが、新聞の内容(2013年7月号)を少し紹介したいと思ふ。

韓国ヨンの高校で使用されている教科書では「オン霊光や月城原子力発電所には、海に捨てる温排水を魚類の養殖に利用するため原発内で養殖場を運営している。養殖の結果、天然よりも2~4

倍ほどのスピードで成長していると確認されている。最近では古里原発の温排水を利用する真珠貝の養殖が成功し、地域住民の新しい所得源になっている。これは放射性物質汚染などの問題もなく温排水の清浄性と有用性が立証された事例である」(『韓国地理』107頁)と記述されているのだ。読んだ瞬間「じぇじぇ!!!」と叫んでしまった。しかし調べてみると日本でも温排水による養殖は行われている。ただ現在、日本では原発停止に伴い原発の温排水による養殖は停止状態にある。海水温が低下したため魚介類の3分の1に被害を及ぼしているというニュースなどもある(『福井新聞』2012年6月6日)。ここで注目したいのは、食品の安全性という問題もあるが、原発の温排水で養殖された魚介類を高評価し、原発エネルギーが友好的なものだと若い世代に教える教育事情である。つまり原発は安全で経済的であり有用なエネルギーであると教えているのだ。日本でも未だに唱えられる時代遅れの原発安全神話そのものである。それが教育の現場でも同様に唱えられ続けているのだ。

今日、韓国の教科書における原発記述は修正され始めている。しかし2012年版高校『物理2』では、チェルノブイリ事故の危険性に言及はしながらも「韓国の原発は安全に設計されており、火災の心配がなく、放射能の流出においても徹底的な安全体制が敷かれている」と説明している。この教科書に現われている姿勢そのものが韓国政府の主導する原発推進の論理である。以上のように原発推進を行う韓国政府に対して『脱核新聞』は韓国政府の原発を広報する教育体制に警鐘を鳴らしている。同時に私も日本において原発すなわち「核」が危険な存在であり、人類が一刻も早く手放さなければならない誘惑の物質であることに警鐘を鳴らしたいのである。

(まつやま けんさく 京都教区 ソウル在住)

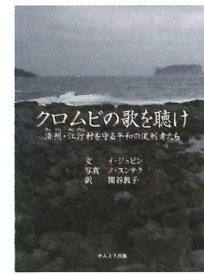
クロムビの歌を聴け

済州・江汀村を守る平和の流刑者達

(講談社)

文：イ・ジュビン 写真：ノ・スンテク 訳：関谷敦子

磯貝 治良



筆者私は黄色いTシャツを着ている。胸に「一江汀」と染め抜かれ、背には「NO WAR BASE」と書かれている。「一江汀」とは人びとの暮らし、自然と平和が一番の江汀村、という意味である。

江汀村は韓国済州島の西南・西帰浦市に位置する人口2000人弱の洞(村)である。そこに1.2キロメートルにおよぶ「クロムビ」と呼ばれる岩がある。火山の島ならではの地質と貴重な生態系をそなえた海辺の岩だ。クロムビの名はそこに植生するハマビワに由来するらしい。

韓国政府はそのクロムビ岩と海を破壊して海軍基地を建設しようとしている。軍民共用の美港をうたっているが、中国(と北朝鮮)をにらむ、ミサイル搭載米戦艦の駐留港が目的にちがいない。この海軍基地建設に抵抗して、村民は賛否のあいだで分裂を余儀なくされながらも、連帯する平和運動家たちと共に果敢にたたかい続けている。「江汀」と「クロムビ」は、今やたたかひの表象となって訴えかけている。

本書は、文・イ・ジュビン、写真・ノ・スンテク、日本語訳・関谷敦子による、4年余におよぶ反対運動からのメッセージである。

写真にはたたかう人びとの姿と同時に、クロムビ岩の素朴で人なつっこい形象がふんだんに写されている。クロムビ岩には孤高を保つように小さな旗が立っている。「決死 反対」とハンゲルで書かれた旗。

たたかひは、巨大な権力と装備をそなえた国家/軍隊との、まさに決死の闘争にちがいない。事実、「陸地」から延べ20万人近い警官隊と何台もの放

水砲、鎮圧装備車が来襲して、江汀村会長をはじめ多くの人が連行、拘束された。

本書はその実態を明かしているが、単なるたたかひのドキュメントではない。副題にあるように、今ここで生きる「平和の流刑者」たちの群像を描き、その「思想」の在りかを伝え、平和を創るとはどういうことかを考えさせてくれる。

「平和の流刑者たち」とは平和の創造者たちだ。江汀村の住人となった「路上の神父」、江汀金氏の「始祖」となった漫画家、身体に鎖を巻いて警察隊と対峙する労働運動の女性リーダー、海女を組織する「海の娘」、たたかひを撮りつづける「ツイッター映画」作家、そして反対運動団体の気骨あふれる筋金入りのリーダーたちと平和団体の人びと。江汀、済州島の住人たちだけではない。フランスから来た「心の治療師」、台湾から来た「平和運動家」もいる。

彼ら彼女ら16人の「平和の創造者」群像の行動と願いと思索を取材する。平和創造者たちの語ることばが、随所にゴシックで刻まれる。そのことばは饒舌とは対照的にシンプルでさえる。なのに、フレーズの一葉一葉が人間のとぎすまされた胸奥の声を伝えてくれる。不条理とたたかう、人間の声。自然と融和する、暮らしの声。

読みすすめるうちに気づく。ここに登場する人びとは「闘士」ではない、たたかうという表現が似つかわしくないかもしれない。そこに居るべくして、江汀を生きているのだ、クロムビを生きているのだ、と気づく。硬い岩を穿つ、やわらかい水のように。

権力に抗する読者を励ます一冊だ。
(いそがい じろう 在日朝鮮人作家を読む会代表)

=感謝です=ご支援下さった皆様

(2012年度：2012年4月1日～2013年3月31日 敬称略 順不同)

いつも聖公会生野センターの活動をお祈りくださりお支え下さりありがとうございます。本来でしたらご支援くださったすべての方のお名前を記し感謝申し上げるべきところですが教会、諸団体、グループ等でご支援いただき、お名前がわからない方もいらっしゃいます。あわせて感謝申し上げます。これからも、お祈りご支援よろしくお願い致します。

(複数回ご献金下さった方も多くいらっしゃいますが、掲載はお一人1回とさせていただきます。)

【個人】

石脇慶聰/堀江裕一/須佐美浩一/岡本勝/宮脇博子/尾崎茂雄/嵯峨崎順子/五十嵐正司/佐藤耕一/日比谷潔/宮嶋真/井田泉/青柳美知子/竹林徑一/呉光現/齊藤壹/齊藤祥子/張聖子/武藤謙一/長野泰信/春名英夫/大西修/古澤陽代/大橋襄/伊藤美佐子/奥田哲夫/山本保彦/木村幸夫/城下彰/岡野利治/小山俊雄/大田美智子/小出裕司/岩城聰/三浦恒久/岩城健太/黒田裕/宇野徹/野村潔/井出吉志子/松原恵美子/金秀男/鈴木憲二/奥晋一郎/川村昌子/中島省三/古澤秀利/山本真/林真澄/原田光雄/出口弘/中村豊/岩田光正/古澤恵依子/兒玉宣昭/猿橋靖・正子/前田良彦・恂子/岡田まり子/大久保忠昭/佐藤千鶴子/当舎あずさ/香山まり子/松居勲/辻本秀子/橋本祥子/福永芽久美/吉岡容子/目崎宗世/古谷美子/高橋幸子/小川昌之/神谷尚孝/内藤昇/速水健二/藤崎とよ/熊澤美華子/大塚勝/塩田純子/西川壽代/佐々木庸/岡本愛子/井口論/黒田益弘/林芳子/保坂久代/松本一郎/辻節子/後藤聡/森中央・みよ子/林香代子/孫裕/越山健蔵/久下克己/中和子/小山紀巳子/関正勝・澄子/内田照子/佐治孝典/泉迪子/後藤由江/東敏勝/高地敬/藤川治彦/小室一/榎本房代/富谷晋/吉田哲子/野上千春/吉田常夫/福田順子/平田強治/近澤淑子/宮橋コウ/小林幸子/雨宮大朔・寿子/畑野めぐみ/中出てる子/平野聡/寺本真名/鈴木靖夫/黒田昇/植松喜久江/坂東長輝/山口善彦/横内洋子/若宮英生/島田由紀子/本田修/内宮隆夫/三村タミエ/桜井揚子/佐藤悦子/相楽弘子/長野加代子/瀬山義美/松田祥吾/田中廉/坪田敬子/早川文子/藤木典子/杉本美津子/大野吾子/堀武/堀貴美子/小堀孝子/江野隆夫/俣野恵子/菅寛量/国津進/国津恵美子/佐谷和子/前原潔/多方清子/古荘和子/今村祥子/服部喜代司/服部慶子/李美好/松浦順子/佐野信三/中村道子/中村香/中村光/中村由香里/中村/内田真理/福崎精造/樋口敏雄/村上君子/東峰多寿/木村多恵子/後藤由美子/中芝正美/井原洋子/藤田法子/早川俊/三宅亨子/岩村正博/河村輝男/今西政弘・時子/武藤六治/辻彩乃/藤永壯/畑野栄一/真鍋倫子/中島千恵子/井原洋子/竹林敏子/金光秀晃/姜聖律/松本正俊/植松誠/中山一郎/中芝永次/山根博子/小野周一/兒玉勢津子/笹森田鶴/高田日出男/辻潤/大畑喜道/石井英隆/趙秀一/舟茂恵子/高見久江/中原恵/大西憲子/松本潤子/宮脇一郎/高見久江/齋藤修/八尾恵三/伊藤美佐子/林香代子/松浦順子/関澄子/富谷晋/小林宏治/小室一/大久保優子/尾崎茂雄/古谷美子/村井幸子/関正勝・澄子/中和子/岡本勝/鈴木憲二/辻節子/宇野徹/野上千春/桜井揚子/金光秀晃/出口弘/雨宮大朔/吉岡容子/目崎宗世/宮嶋真/吉村元位/成岡宏晃

【団体】

こひつじ乳児保育園/松蔭女子学院/堺聖テモテ教会/(有)冷麵館・春山宗治/大阪教区婦人会/日本聖公会九州教区/聖ニコラス保育園/石橋聖トマス教会/大阪聖アンデレ教会婦人会/学校法人プール学院/田辺聖公会愛の園シオン会/豊田商店/関東三教区生野委員会/関東三教区生野委員会/聖公会生野センター大阪教区後援会/大阪聖パウロ教会婦人会/日本聖公会大阪教区婦人会/芦屋聖マルコ教会/プール学院中高/かんよう出版/石橋聖トマス教会/大阪南ブロック合同礼拝信施金/教区教役者会信施金/榛名聖公会/五條聖三一教会/大阪教区南地区3教会/広島復活教会/日本聖公会北関東教区/日本聖公会管区事務所/尼崎聖ステパノ教会/川口基督教会/志木聖母教会/大洲幼稚園/名古屋聖マタイ教会/東京聖テモテ教会奉仕会/平安女学院中高チャペル室/下鴨幼稚園/草ヶ江幼稚園/福井聖三一教会員一同/市川聖マリヤ幼稚園/稲荷山幼稚園/川越基督教会/良善幼稚園/尼崎聖ステパノ教会/西宮聖ベテロ教会/尼崎聖ステパノ教会婦人会/大阪聖パウロ教会/愛光幼稚園/守口復活教会/恵我ノ荘聖マタイ教会/農大輔/芦屋聖マルコ教会/三光事業団/聖パウロ教会/市川聖マリヤ教会/桃山幼稚園/豊田幼稚園/聖公会栄光学園聖マリア幼稚園/諸聖徒幼稚園/名古屋聖ステパノ教会/松浦順子/聖マタイ幼稚園/聖光教会/立教小学校/聖マルコ幼稚園/プール学院/松戸聖パウロ教会/銚子諸聖徒教会/関西韓国YMCA/米子聖ニコラス教会/神戸昇天教会

2012年度会計報告

	科目	2012年度決算
収入	受託事業	11,470,960
	利用者負担金	4,936,425
	会費	1,623,000
	分担金	1,820,000
	献金/寄付	3,934,858
	雑収入	145,324
支出	助成金等	965,000
	合計	24,895,567
	事業費支出	5,827,139
	事務費支出	4,481,142
支出	人件費支出	14,346,395
	次年度繰越	240,891
	合計	24,895,567



「ウルリム」の編集員としてこれからお世話になります、古澤秀利です。どうぞよろしくお願いたします。

生野センターが小路東にあったころ、センターで働いていた今の妻に会うために何やかんやと理由をつけて遊びに行っていたことを思い出します。当初は生野センターの働きが何なのか、いまいちピンときていませんでしたが、実際働きの中に身を置くことで一つ一つの働きがいかにか重要なものであるかが見えてきたように思います。もっとも私の場合は動機が不純でしたが。神さまの導きはととてもとても不思議ですね。

これからよろしくお願いたします
古澤 秀利

生野センターの働きのなかで一番思い出に残っているのが「のりばん」です。今はセンターの一階で行われていますが、以前は長屋の一室に集っていました。お昼ご飯に私もまぜていただきましたが、私がただ若いという理由で（当時私は20代前半でした）ご飯のおかわりをひたすらに勧められました。まるで椀子そば状態！あんなに素敵なもてなしを受けたのは後にも先にもあの時だけです。「のりばん」のあの深い交わりの時は今も健在なのがうれしく思います。ほんの少しですが、また生野センターにおじゃまできることを本当に嬉しく思っています。これからよろしくお願いたします。

（ふるさわ ひでとし 大阪教区執事
高槻聖マリヤ教会）

余韻

■本来なら5月に発行する予定からずいぶん遅れてしまいました。会員、支援者、読者の皆様にお詫び申し上げます。その代わりでもないのですが12月の衆議院総選挙、7月の参議院選挙後に発行となったことはこの社会の進んで行く道が見えるようです。■ねじれ解消・巨大与党出現の後に来るのは事実だけを見ていっても「増税」「原発再稼働」「TPP交渉参加」そして「改憲」論議でしょうか？不思議なことにこれらはほとんど先の国政を左右する選挙で与党は正面から論陣を張りませんでした。これってやはりおかしいのではないだろうか？と思います■「鶴橋大虐殺」って言葉を知っていますか？2月にある中学生の女の子が鶴橋駅前、マイクで叫んだ言葉です。東京の新大久保のコリアタウンもほぼ毎週このヘイトスピーチが叫ばれています。「良い韓国人も悪い韓国人もみんな殺せ」というプラカードも出現しました。これは国会でも問題になり安倍総理は「・・・日本の品位を貶める」と答弁しました。その通りですが、答弁でヘイトスピーチにさらされる韓国人への慰労の言葉はありませんでした。一番大切なのは当事者を励まし、力づける言葉ではなかったでしょうか？■猛暑の中ですが、この夏も皆様が健康であらんことを祈っております。（ピックアンチャ）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

- ◇正会費 年額 1口 10,000円
- ◇後援会費 年額 1口 3,000円から
 - ・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
- ◇自由献金・クリスマス献金
 - ・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
 - ・銀行振込 三菱東京UFJ銀行 東大阪支店
普通預金 4654965「特定非営利活動法人聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0002

大阪市生野区小路3丁目11番19号

TEL06-6754-4356/FAX06-6224-7869

E-mail: ikuno@nssk.org

http://www.nssk.org/province/ikuno

発行人：大西 修

ウルリムは再生紙を使用しています。